特別支援教育の扉 №200（記念号）　令和８年10月１日発行

「元気いっぱい・笑顔いっぱい」

特別支援教育統括コーディネーター　加賀谷　勝

「通信200号を振り返る」

「全ての教員」が特別支援教育の扉を開け、多様な背景や発達特性のある子どもたちを「元気いっぱい・笑顔いっぱい」にしてほしいという願いを込めて発行した通信が200号を迎えました。今号では記念特集として、読者から反響の多かった内容を紹介します。

○「無言の間、無言の仕草」　№13

園や学校訪問の際、互いに「お世話になりました」「ありがとうございました」と挨拶を交わす。少し間を置き、玄関を出て再び振り返ったとき、互いに無言でお辞儀をする瞬間に、心が通い合ったと感じる。電話も相手が受話器を置いたことを確認してから、静かに受話器を置くようにしたい。無言の間、無言の仕草に心を込めよう。

○「相手を気遣える人になりたい」中学生　Ｓ・Ｍさん　毎日新聞の投書欄より　№14

学校からの帰り、私はいつも通り２人席の窓側に座った。すると、ヘルプマークを付けた男性が空いている隣に座ってきて、「どこで降りますか」と聞いてきた。私は「○○で降ります」と答えた。私は少し驚いた。普通なら乗った途端に、隣の人にどこで降りるかなどとは聞いたりはしない。「どうして聞いたのだろう」。バスに乗っている間、ずっと考えていた。やがて私が降りるバス停に着いた。その時だ。隣に座っていた男性は、早めに席から立ち上がったまま体をよけてくれた。そして、お辞儀までしてくれた。やっとわかった。男性は体が不自由なため、私が降りることがわかってから自分が立ったのでは時間がかかってしまう。だからあらかじめ私が降りるバス停を聞いたのだ。私がスムーズに降りられるように。私は男性の心遣いに気付き、とてもありがたく思った。そして、私も男性にお辞儀をしてバスから降りた。相手を気遣って行動することは、相手だけでなく自分もうれしい気持ちになる。私も相手を気遣える人になりたいと思った。（原文のまま）

○「ありがとう」と「自分の名前」　№21



子どもに伝わる効果的な話し方の一つとして、「穏やかに・近付いて・静かに」がある。そこに、子どもの名前を入れると、もっと注意を引き付けることができる。自分の名前は、生まれたときから数え切れないほど聞いているため愛着がある。「ありがとう」と同じように、最も心地よい音、聞き取りやすい言葉だと言われている。周りが騒がしい状況であっても、自分の名前が呼ばれると必ず気付く。大事なことを伝えるときは、子どもの名前を呼ぼう。

○「あなたを笑顔にしてくれる言葉はなんですか？」住友生命アンケート結果より　№89

ありがとう（48.4％）、大好き（９％）、愛している（2.5％）、頑張っている（2.3％）、かわいい（1.8％）と続く。ありがとうの反対語は当たり前。これぐらいは当たり前と思い違いをしてありがとうを言わなくなると、人の縁は切れる。ありがとうと言われた瞬間こそが、「誰かの役に立っている」と確信できる瞬間である。小さなことにも「ありがとう」を言おう。

○「尖った口調にならないように」　南　明奈さん（タレント）　№56

相手がドアの鍵をかけ忘れたときに、「なんでまた忘れたの！」「ちゃんと鍵閉めて！」とぶっきらぼうな言い方をすると、向こうも嫌な気分になる。「また鍵開いてたよ、私が誘拐されたら嫌でしょう？」と柔らかい言い方で伝える。伝えると責めるは違う。相手の落ち度に、次から気を付けてもらいたいのであれば、穏やかな口調で伝えればいい。口調が尖ってしまうのは、非を責めたいという気持ちが強いためで、それが相手を嫌な気分にさせる。責める気持ちは、相手の落ち度にかこつけて、ストレスによるイラ立ちをぶつけているだけが多い。子どもに何か注意する際は、毅然とした態度と、思いやりや気遣いが大切になる。

○「子どもへの対応の原則８」～問題行動を減らそう～　№65

１　問題行動をなくす支援から起きない支援を考える。
２　事前にルールを決めておく（事前指導、予防的な対応）。
３　禁止するときには、どうすべきかを教えて練習をする。
４　視覚的・具体的・肯定的に示す。
５　刺激や情報を制限・遮断する。
６　言葉だけでなく、行ってみせる。
７　子どもの目線で見たり、感じたりする（なぜ？）。
８　叱らないけど、譲らない態度をとる。



子どもは困っているから行動する。子どもの行動は、「困っていること」を探る手掛かりになる。子どもの行動を「問題」ではなく、「支援の手掛かり」と考えると、子どもは大人を信頼する。子どもの気持ちに目を向け、理由を探ると答えが見付かる。支援は本人に聞く。

○「歯でガードしているんです」→「は？」　No.72

知能検査の中には、制限時間内になるべく速く間違わずに作業をする課題がある。ある小学生の子どもが、注意を集中させてその課題に取り組んだ。終わった途端、白い前歯を出したので、「どうして歯を出しているの？」と尋ねた。すると「今、私はドキドキしているから、心臓が口から飛び出さないように歯でガードしてます」という答えが返ってきた。そのユニークな表現に、思わず笑ってしまった。→この子は中学生になり、通級指導教室を利用して社会的スキルを身に付けている。

○「主導（先手の対応）と受容（子どもに寄り添う対応）」　No.82

主導も受容も特別支援教育において大切な「枠組み」です。安易な方法をとると、主導が強制や抑圧になる。何でも言うことをきくと、子どものペースに飲み込まれて誤学習になる。「主導」と「受容」のバランス、子どもと適切な距離感を保つことが大事になる。

○「見付ける（気付く）は、学びの第一歩」　No.90

①聞いたことはすぐ忘れる、②見たことはよく覚えている、③やったことは分かる、できるようになる、④自分で見付けたことは身に付く。人は自分で答えを見付けたとき、気付きの喜びに満たされる。その喜びをエネルギーに、学びの第一歩を踏み出せる。同じ答えであっても、自分で見付けるのと、他人から教えられるのとでは大きな差がある。子どもが自ら見付ける指導を心掛ける。

○「何気ない一言に救われた」～あるコラムより～　No.104

1　高校時代、長く飼っていた犬が死んで泣きじゃくっていたとき、保健室の先生に慰めてもらった。「お別れがあるから、その時を大切にできるのよ」と言われ、思わず納得。犬の死を前向きに受け入れることができた。

2　娘が幼稚園の頃、我が子に反発ばかりされて悩んでいた。担任の先生に打ち明けたら、「私はＡ子ちゃんが大好きです。お母さんも今のままで大丈夫です」とおっしゃってくれた。Ａ子を大好きだと言ってくれたこと、私を肯定してくれたことが、その後の大きな支えになった。

○「一人一人の子どもが見えていますか？」　No.112

学級集団が大きくなると、一人一人の子どもと個別に関わる時間が少なくなる。しかし、子どもたちは、先生がどんなときに、どんなふうに、自分たちに声を掛けたり、関わったりするかをよく見て、感じている。先生がそこにいて、一人一人の子どもを見守っていることを知っているから、落ち着いて過ごせる。子どもが伸ばした手を握り返す。それが日々続いて、子どもと先生の間にあるものが精神的な絆である。

○「優しいうそ ～バスの来ないバス停～」　No.169



認知症を患ったお年寄りが、むやみに外に出てしまうのを防ぐため、施設の玄関前に『バスの来ないバス停』を設置する介護施設が増えている。『バスの来ないバス停＝うそのバス停』には、認知症の人の思いに寄り添いながら、命を守りたいという介護職員の願いが込められている。「そろそろ夕飯の支度をしに戻らないと」、「病気の母親の看病をしに帰らなきゃ」・・・、今現在ではない記憶の中で生きている認知症のお年寄りは、「家に帰りたい」という気持ちにさいなまれる。職員はお年寄りの「帰りたい」という気持ちに寄り添い、「では一緒にバスを待ちましょう」と声を掛ける。安心したお年寄りは、『うそのバス停』のベンチで座って待つ。もちろん、待ってもバスは来ない。待っている間、体調や天気の話をして、「お茶でもどうですか」と誘うと、「そうだね」と言って穏やかに部屋に戻る。バスを待つ間に気持ちが切り替わる。

バスが来るのはうそ、バス停そのものも偽物。しかし、「家に帰りたい」というお年寄りの気持ちを否定したり、あなたの行きたい場所はないと伝えたりするより、ずっと優しい対応ではないか。優しいうそには、相手を思いやる気持ちが含まれている。正しさよりも優しさが大切である。

○保護者の不安は一生続く　No.196

保護者の障害受容は、らせん階段を行ったり来たりしながら登っていくと言われているが、保護者の子どもへの不安は、ずっと消えることはない。保護者の不安を子育ての原動力に変えるために、安心材料（子どもの頑張りや伸びている点）を伝え続ける。吃音のある子どもが苦しいのは、吃音でいられない環境である。子どもが今ある未熟な力、手持ちの力を全て使い、安心して次の段階に楽々いけるように保護者を支えていく。保護者の見方が変わると、子どもは変わる。

「通信を指導の参考にしています」「全てファイリングして悩んだときに見ています」など、みなさんからの声が通信発行の原動力になっています。これからも「特別でない、当たり前の特別支援教育」を実現するために、有益で楽しい情報発信に努めます（あ）。